

右通  
船而  
吹多雁取帳

大門口

絵

此草紙の大意は、雁が飛  
べば、石龜のじたんだと  
いふ如く、つひに草本の  
作はなさねども、萬十が  
趣向を唱すに任せ雁みん  
なみなさるやうにせなら  
ば、書作ともに初舞臺上  
き御評判に跡の雁が先へ  
行かば本買ひとらしよ、  
雁々の三つものとなして  
雁首を下げて申上げます

叙

北山中納言乃大筆を一磨ぎあてハ石龜のじたんだと云  
とくつゝ年半中のれをまわすとすとすとすとすとすとす  
に便せ弱もんがみなすふとすとすとすとすとすとすとす  
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす  
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす  
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす

奈時野馬平人

左近藤喜久  
人

こゝにところはお漁簡町  
引出し横丁にきくがま屋  
といへる質屋あり。且那殿はかたじけないに一割の利息をかけな、あたじ殿はあくまでうちやうふえか  
けないを植ゑ込み、萬氣みをならせず、名を主とし、手渡をひどかせて暮しける故、番頭手代多く使ひ、何不足なく暮しきる。とりわけ且那殿はとんちきの癖に道具質をとる故、味噌に利久の茶杓の古近江の三味線などいろいろなものを持って來りしが、元來といへば、番頭の金十郎は自利といふ事は流目より知つた點のなき故、折り持つて來りし質物を持たずして、今日は鎌刀木の三昧線を今日持つて來りし所にて、口説く。

「これはわたくしが所柄で、藝者の三昧線でござります。どうぞ二十兩貸してくんなせえ。」  
「なんばたがやさんだといひなすつても、且那



殿は留守なり、わたし  
かはちつとばかり米櫃を  
噛る位はござりやすが道  
具のものはお先御暗。且  
那の歸るまで一分持つ  
ていきな。二日ばかり  
に二十兩道ひ果して一  
分残るといふ文句さ。

せん度の拾羽織も返し  
せぬ。但、附け更へ  
途方もねえ、二十兩の  
質を一分とは條りつれ  
ない番頭さん、丈は古  
いから才三さんとても  
云つたら、二十兩貸さ  
うか。

と上げたり下ろしたりし  
てくどく。

何うやらかみ駒のあた  
りに取があるやうだ。チテン

ツクチトおいら面白  
の春景色、口でいふに  
は手が遅らず、そして

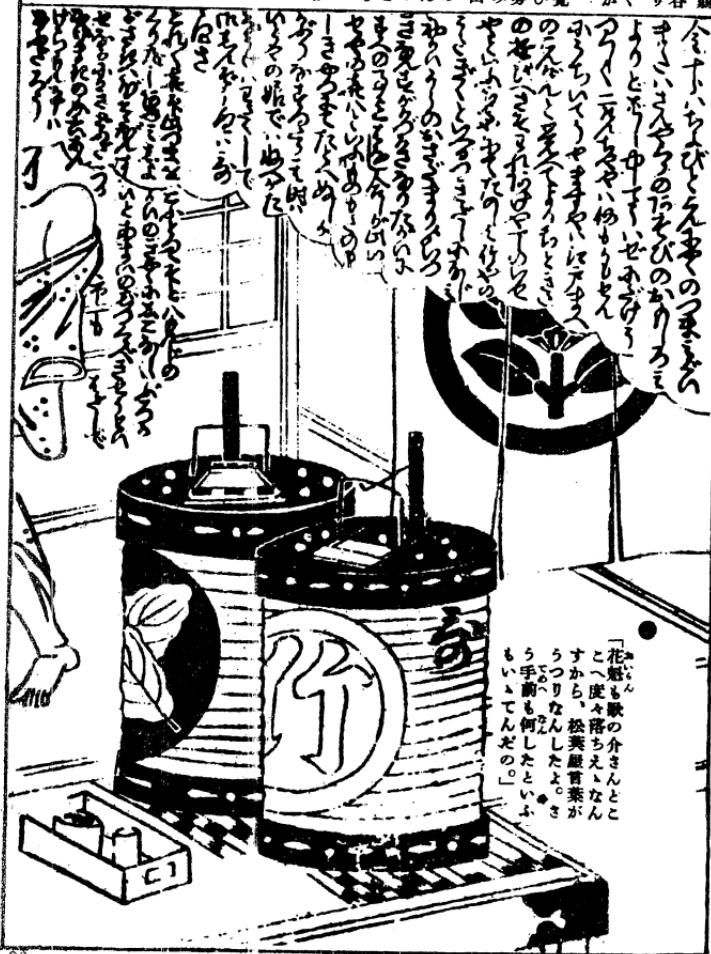
魚と水とも久しいもん  
だ。

小僧、披み浴衣も、  
よ加減にしまられて、お



金十郎は、ちょびと蒟蒻の摘み食ひ、または山谷くらの遊びの面白味より土橋中町は錢だけつくしく、二軒茶屋は何もかもせんにうち、銀杏屋、梅屋は江戸前の根元と覺えてより、ちと北の遊びへ誘はれ、揚屋町の伊勢屋といふ茶屋にて楽しみ突出竹屋の歌菊といへる突出に馴染み、初會うらの定めより、互に末のことが話し合ひしが、この伊勢屋の喜八といふもの頼もしき奴にて、「たとひ、主がかりなつたら、その時は、あらねえが、店請けはわたして御新造様は歌採さ。」

「これ／＼喜印、この椿をかうとつて、外八文字のくり出し歩み、初會の客にしこなしは、ぶろかどさきへぼとち中なかき、酔いと甘いの實くらべ、起請書（紙）春市もはだしで、逃げ巻の



「花魁も歌の介さんとこへ度々附ちえくなんすから、松美屋吉葉がうりなんしたよ。さう手筋も何したといふもいってんだの。」

助六、あんけらもん平  
はどうだらう。」  
もし且那へ、「二階で歌  
の介さん、云ひなんす  
には、いつそむら様は  
酔ひ潰れて寝て居なん  
ですから、今宵歸し申し  
て心許なうあります、  
泊め申さうと云ひなん  
すが、さうしても可か  
らうかね。金様えゝ加  
減に裁きなんし。」  
二階の客人は引け時分  
に梅でも買つて來て上袖  
の梅がたがい。金さんの  
蛇道中はおそろが池の大  
思ひ出します。」  
ヨヤ／＼馬鹿らしいよ、  
道中の眞似かえ。富士  
太郎が後前になりいし  
二階に外の客人もあり  
いす、ちつと静かにし  
なんし」  
「歌野や、また眠るぢや  
アねえか。」



金十は且那の金で奢りちらし、仲の町は人目多しと揚屋町で洒落しが、歌菊にのぼりつめ、鶏を無性に惜がり、鐘つき坊主を親の敵のやうにいひしが、朝の歸りのすいがへりには大門で必ずえのひと聲が耳に残り、圓ひしてある井戸の際の路の悪いところへ來た時分、もしえ何ぞ忘れやアなんせんかといはれ、頭を振るも人目を恥ぢれども、心の中では内の工面を瀧面つくつて案じ、十一面觀音へ願もかけられず、七面倒なりとなげやり三我になりけるも皆女郎貢のお冷飯なり。

「こゝの内にも赤いべ  
がいけえ事ある。もう  
一ほん錦たせえ。今夜  
はなぜか引けが見えね



えの  
 むかうに人へ、早く  
 来きつせえよ。  
 あすの朝は茶漬を食ひ  
 のずい歸りだせえ。今  
 夜は大方第そのか第の  
 井といふ名代らしい晩  
 だ。  
 懸推ばかり仰んす。行  
 燈に無駄事、もう歸る  
 も古い奴ね。  
 もう歌の介様はとんた  
 お志のよいたて引きも  
 御座ります。手はよし  
 咽はなさる、ほんに六  
 燕とやら、厄介とやら  
 か捕ひやした。  
 まではあそこの格子先  
 面白きうに話して、居  
 さしやんしたと聞く時  
 は、淀みぐ、腹も、立  
 田山。」



金十郎は流連りゅうれんなどが度たび  
かさなり、親方の大のも  
うせんとなり、親方のお  
やぢ甚だ腹はらをたち、古温袍こおんぱ  
袍に寝座ねざ一枚にてお拂ひ  
箱の身となりしが、いつ  
ぞや喜八がまさかの時は  
どうともといひし言葉に  
まかせ料理番りょうりばんでもしてみ  
る氣になりしが、世にあ  
りし時質じしつにとりし鐵てつ刀木ぼく  
といふ三味線さんみせんは高いもの  
なるよし、これから旅屋りょくや  
を初めけるが、初手のう  
ちは釣瓶の底の抜けたの  
や、四斗様よんとうようを切つて水桶  
にする位の事をして、裏  
店住居してゐるうち、揚  
屋町の喜八たのしき奴やつねに  
て、港草竹町に表店を借  
りて手桶を夥しく仕込み  
ける。



おのれ不屈な奴サムライ  
城に心を奪はれ惜い  
奴ちや、出て行け!」

「ア、氣の毒な事を。今  
まで二の膳を食つた代  
りにこれららはお冷飯  
の段だ。金々が過ぎた  
からあの通り、大通の  
しまひは鈍通には劣つ  
たものだ。」

「あの人もどうやらおら  
が仲間になりきうな人  
だ。」「久しいものだが、  
といふ身だね。崖一つ  
で、飛鳥の別れ、おの  
れを貰むるおのが家、  
出て、行くこそ悲しけ  
れ。」



それより喜八が店舗に不在となり、竹町邊に店借りしてはじめしが、今日  
桶屋をはじめしが、つい長戸の左次兵衛が話  
に、おらは陳を施業の果て御座るが、途方もない  
い寒い國で、雁や鴨が大きな池に凍りついてゐる  
のを娘をねちつてはとり、腰へつけ出します。  
これを並びでとりに行く  
故に解取帳といふを拵へ  
がん谷闇でその前面を改めます。金十これを開いて腰を浴し、  
何とそれはとつて來て  
安針町へ賣つてやると  
いふ所はどうだあら  
「そりやあいよ點さ。」

「どうぞ路銀を拵へて金儲けに行きたいものだ。」  
「今時の傾城に誠なしとは嘆き、誠も少しは有  
川山、また喜八が諸事と世話をして幕の鐘、と  
洒落るも根づから冴えやせん。」



帳取雁多陸

「もうお一つ、お過し  
ノヽ。」

毎日たが屋敷は昔の奢に  
引き代へて、がたりびし  
りして、髪きを送りしが、  
いつぞや雁の凍りついて  
居る話をきゝ、内へは市  
へんと手間取りを多く入  
れて、その身は雁の國へ  
と赴きしは咄の種とぞな  
りけるは、どうやら萬八  
のおつ冠せらしい仕打ち  
を一肌抜けてまゐりま  
す。

「この籠懸けてしまつた  
ら柳行李を買つて來て  
雁をしよしめに行きま  
せう。もしとれぬとき  
はがんといふ話だ。」



金十雁國の道行

がんと打つ鐘に恨は多  
けれど雁全といふ名に  
惚れ、駆を筑紫の岸  
國へ、雁取帳を取りに  
行く心の中の愁心の、  
利口に口はしやべれど  
も、一體雁がまやなれ  
ば、本讀む事も奈良晒  
黃稚子は高く思へども、  
諸方のかり金雁木龜と  
せつかれて、どうぞ今  
度は雁をいくらも捉ま  
へて樂雁をせん志、内  
をしきる事もなしに旅に出る  
とは大體、人の手桶を  
かり種に、つるべた鉈  
を掛け溜め、世間の奴  
を狼狽と、眺めて見ん  
と思ひつゝ、旅の衣裳  
をみがきたが、笠傾け  
て出でて行く、慾の程  
こそうたてけれ。」

金十雁の五り

ぐんとうみふうもハケナねど  
くさみとス名エカれてうそどア一の  
セカクホー! トロ快とどう小やうの  
アラのよ、えのこかくちハキダシテ  
リスハムカマヤアレヘナヨモドカ  
アリシカシハモカモアヒタヒモカモ  
のウリ金だんきヤモカモとヤカレ  
のクソをこへとハラニシカモカモ  
テトキをこへとハラニシカモカモ

すまどりのまよひをも  
たびをそとねたたかの人のて  
あまどりのまよひをも

すまどりのまよひをも

たびをそとねたたかの人のて

あまどりのまよひをも

たびをそとねたたかの人のて

あまどりのまよひをも

たびをそとねたたかの人のて

あまどりのまよひをも



雁取帳多岐

「何だかとんだ所へ來た。  
中田園といふ所だ。こ  
れよりさきに道もなく、  
頼光殿に腰をかけ、と  
いふ風景だ。」



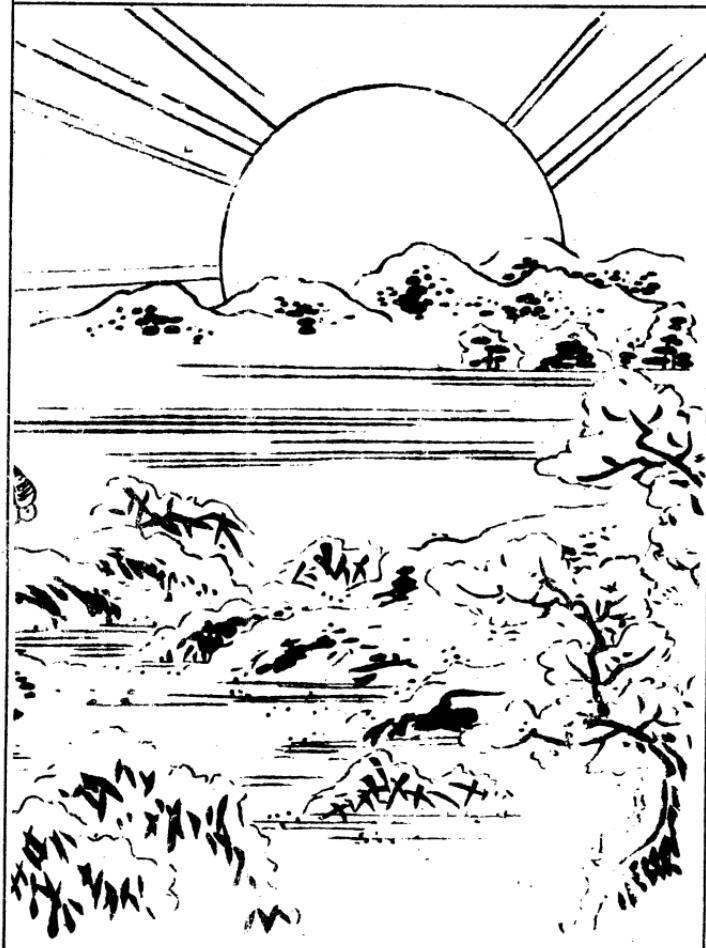
雁國へ行きついで  
みたところが、左次  
兵衛が話に違はず、  
雁はみんな凍りつ  
いてゐる故、雪の  
中を押しわけて、  
頸を擦つては腰  
へはさめば、その  
重たきことは挽白  
を腰へつけた様な  
見ても雁どもは人を  
ならず、みんなが  
んといふ目に逢ひ  
しは、この國より  
ぞはじまりける。  
—これは／＼妻じ  
い雁だ。みんなが  
つとしてゐるが、  
どうやらきつ先生  
の化かすといふ仕  
打ちではないか、



家鴨なれば來い來  
い豆食はせうとも  
云はうが、雁來い  
く小豆を食はせ  
う。』



思いれ雁を腰につけ、しよつてする時、東立たんとする時、西立たんとする時、方しのゝめの景  
あかく、朝日たたりしかば、腰にち色々  
次第に解けて嘘八百羽ほどの雁が羽八  
挟みし雁の水次第に解けて嘘八百羽ほどの雁が羽八  
鐵砲だまに帆をばたきをする音は羽掛  
松若は天狗に渡は昔は金羽八十郎も一時に雁  
はれ金八十郎は雁に渡は昔は金羽八十郎も一時に雁  
見ぬ國々を見ぬ國々を下しありくこそをかしけれ。



「鶴に乗つた仙人は見たが、雁に乗つたはこれがはじめて。さぞ内では駆落でもしたと思ふであらう。ほんの雁が飛べばしつぽんの地圍駄。」



見下せばいきょん國の  
ありさまは、うちに錢少  
く、きやんこくかんはそ  
の昔こりやまたといふう  
んづくが、とはうもない  
を植ゑしとかや。大通國  
には大様に錢金萬とまき  
ちらし似た山のうぬ櫻、  
文の使は來たりぶらまの  
山、女子の島には男なく、  
向島の如くなる舟着き宜  
しき所にて、舟から客の  
あがる時桂橋へ迎に出る  
が茶屋の役、中居といふ  
とも申にゐず、太鼓とい  
ふとお音もなし、金次第  
にて割利生ある國々を離  
と一しょに飛び行き、と  
まりも知らぬ雲の上、雲  
を掴むといふ事も、かゝ  
ることをやつなるべし。



「一日が舞ふがらつくしい  
 玉だ。扇屋の五明亭か、  
 萬屋の突出しといふ身  
 だ。どうぞもしこんな  
 ところへ落ちてみたい  
 ものだ。自由にならぬ  
 ものだ。ア、久米の仙  
 人になりたいものだ。  
 通を失ふ通を知らず。  
 仙人氣にもなられぬ。」

「あれ見なんし、雁と一  
 しょに道中をいす。  
 人間の様だね。あれが  
 比翼の鳥とやらであり  
 いせうりどうらか助兵衛  
 さうに見えいすよ。」

「おさきどん見さつせい。  
 アレが久米の平内とや  
 らいふ仙人かの。」

「おまへとんだ事をおつ  
 せえす。そりやア久米  
 の天人さく」



金十も物を食はずに飛び  
あるきし故、蟲酸も走り  
しまひ股が胥へつくほど、  
ひだるくなりし故、帶は  
段々緩くなるに従ひ、  
雁は残らずがや／＼で、  
いつ來なんすといふ捨て  
言葉の暇乞もせず飛び行  
く故、金十は羽根なき鳥  
の如くにて伯良が羽衣を  
質に入れた如く、大人國  
へ眞這樣に稻光どろく  
の世話もなく雲の破れか  
ら落ちかりしは、久米  
の仙人二代の後胤ともい  
ふべし。

「さて大きな頭の國だ。  
久米の仙人は股の白い  
を見て通を失ふが、お  
れは頭の通を失ふが、お  
世が末になれば股と頭  
世どちがふものだ。」



帳取多雁陸

大人國の名主殿の引窓から茶釜の上、茶鑑の蓋の上へ落ちしを、娘や母親

寄り合ひ、弄びにする。

「よく御覽うじまし、豆人形とは大方この事で

御座りやせう。」

「餘り弄り廻はして潰さ

ねえやうにしやれ。」

とねぶにしたる鬼灯の如くとり扱ひけり。

「さても大きな女だ。仁王の嫁御だあらう。たゞしは奈良の大佛の娘か、釋迦が歎が花魁といふやうな事か。」

「あれ何か言ひやすよ。」

わねむら。や  
トよ



それより大人共みんなへ寄り合ひ、汝は何人なりといふ故、われは大日本江戸の生れるが、雁國へ來りしの課、並びに懷より歌菊が文など出しして見せられはそこの方お商賣は何なりと問ひし時、私は旅屋なりと挨拶する。そんなら手盤の兼を離けて呉れるとたぬ故まづ瓶の種にありつき、珍らしき人なりとて大盆に酒を振舞ふ。金子は右の盃を兩手どり、體中の力を出して腰をのし、横の方から抜んでさしたるを、兩手にて俵を持つやうに肩へあげて腰をのし、食ひける。人と共は歌菊が文を見れば、こまかに小さくして見えず、よつて虫眼鏡に入れてこれを讀む。



大陸雁獲多取

「あい客れます、ではね  
え潰れます」花さん  
が描いた浮世の盃が随  
分大きいが、これから  
見ては小原でもねえ。  
しつかりと持てよ。  
おれが所の手廻もちと  
小さいから、ちと大き  
くして貰はう。さしわ  
たし八尺位あればい  
い。」

何だ。ようも／＼せん  
じはかししに御すま  
せなされしみく夜を  
あかしまるらせ候。い  
やな奴だがいゝ手だ。  
歌菊といふはどんなん  
が大見のものだ。  
さあ、おれにも見せた  
がい。手前ばかり見  
ずともちつと見せこよ  
みく。



手廻の簾を懸けてみると、江戸の井戸側より十  
倍大きし。よつていろいろにして櫻の木に吊し、  
簾と簾を懸けしが、簾の段々と簾を懸けしが、  
粗細一つに色々と工夫されども懸らず、その上酒はま  
はつて来る。そろそろと泣き出す故大人共はどうと笑ふ。  
その時金子そばにありける大人の上着をしばし假りに着て、既に拍子をはじめる。

### どうせう寺

雁に恨みは數々ござる  
初手に鶴をとる時は、  
諸行無性につかむなり  
後に羽をのす時は、世々  
上滅多に飛びあるき、  
天上の名ひ腹も寂滅爲  
樂となり、大人國へど  
つたり落ちるぞはかな  
げる。



「何のことはねえ、俄の舞子を舞ふやうだ。」

「三つ蒲團の上に五つの夜着かぶりといふ身

だ。」「チンチツツンテンテツ

トン。」「アレが魔子とやらがし

した身振りかの。纏が疋心をつかふやうだ。」



どうしても中籠が懸らぬ故、名主殿へ持参して旦那寺を頼み詫び言してゐる折、不思議なるかな、胴籠がみりくいふが最期、その跳ねたる音は玉屋が仕掛けの如くなりしが、それはねるさきに金十郎は居合はせて、その跳ねた籠の勢に、いづくともなく跳ねとばされ、またどんなところへとび八丈島へでも行けばいいがと、むだをいひながら、天道様次第におつこちる工面をする。



「あれへ、褲の  
下りが見えま  
す。」

「一文鳳の緒の  
切れたやうだ。」  
「とんだこと、  
は大方此んな  
事だらう。」



金十郎は跳ねられたる勢に  
いつくともなく飛びある  
き、浅草藏前通りへ飛んで  
来て、やうやくおのがう  
の前の手桶の積み上げた  
上に落ちかゝりし故、家  
内の手間とり共何事ならん  
と見てあれば、且那殿なり。  
これは／＼丁度よい時お歸  
り、明日は浅草の市なれば  
留守に持へた飯手桶を残ら  
ず賣り出さんといはれて、  
金十郎も件の様子を話し、  
大笑ひをして、夜も明けれ  
ば手桶を運び出し、奥山狹  
しと積み並べしに、吉原よ  
り來りしとて、只一口に十  
二萬三千四百五十六の手桶  
を買ひ上げしは、勝の漬れ  
しことなれども、金十は金  
儲けしたあとで、よく聞け  
ば歌菊が喜八といひ合せ、  
主に金も送られまいしと、  
遁つてのけたる邊引狂言。



「犬の糞や馬の糞のねえ  
ところへ落ちればいい  
が、天道人殺さずだ、  
あんまり行き過ぎて海  
へでものめりこみ、青  
海省にでもなつて半玉  
になるもいゝところだ  
あらう。」

その間に金十は先主より呼  
び戻され、もの如く番頭  
様となられ、歌菊が年があ  
いたら女房にならうほど  
に、廟へちよつとなりとも  
御出は御無用、御身の爲懲  
しといふもある國な奴と、  
目出度を祝しけれ。



このところは  
皆様御推量で  
も知れた千秋  
萬歳、書くは  
きつい無駄。

びところはまことにや  
でもあれど  
千秋の事せんまくの事

